思いやりのバトン

奈良市立飛鳥中学校3年1組　彩衣里（あいり）

No. 1

私の兄には、生まれつき知的障害があります。一人で留守番をすることも、買い物に一人で行くこともできません。家族の助けや、周りの方のサポートがなければ、兄は毎日の生活を安全に過ごすことができません。そんな兄を見て育った私は、「もし、家族が誰もいなくなったら、兄はどうやって生きてくのだろう」と疑問に思いました。この疑問とこの作文を書くことの二つをきっかけに、私は身の回りの「お金」の仕組みについて調べました。

調べる前の私は、税金を「買い物をしたときに余分に払わなければならない、もったいないお金」だとしか思っていませんでした。しかし、色々調べたり、両親に話を聞いたりして学ぶうちに、税金は私たちの暮らしを、特に兄のような障害を持つ人の生活を支えるために、無くてはならない大切なものだと気づきました。兄は週の半分ほど、障害福祉サービスを利用して、放課後に専門のスタッフの方と余暇を楽しんでいます。また、将来は、家族から自立して暮らすためのグループホームや、働くための作業所という場所に行くそうです。これらの施設やサービスを運営するために、たくさんのお金が必要です。もしこれら全てを自己負担で支払わなければならないとしたら、普通の家庭では生活が成り立たなくなってしまいます。兄が利用しているこれらの福祉サービスにかかる費用の大部分は、国民のみなさんが納めてくれた税金からだされています。つまり、兄が毎日笑顔で、安全に過ごせているのは、見ず知らずの多くの人々が税金という形で社会を支えてくれているおかげなのです。税金は、ただ国にお金を払うというシステムではなく、社会全体で助け合うための「思いやりのバトン」なのだと感じました。

No. 2

日本には、どんな人であっても、健康で人間らしい生活を送ることができる権利があります。兄のように、生まれつき一人で生きることが難しい人であっても、その権利は平等にあります。税金があるからこそ、障害の有無に関わらず、誰もが安心して生きていける社会が作られているのです。

私は将来、社会に出て働いたら、しっかりと税金を納めたいと考えています。それは義務だからという理由ではありません。今まで兄を、そして私たち家族を支えてくれた社会へ恩返しをしたいからです。そして今度は私が、ちょっとでも誰かの安全な暮らしを支える人になりたいと思います。

税金は、兄の未来と、私たちの社会の優しさをしっかり繋ぎ止めてくれる、大切な架け橋です。誰も仲間はずれにされることなく、共に支え合って生きていける豊かな社会を維持するために、税金が果たす役割の大きさを、私はこれからも忘れずにいたいと考えます。